SCJ 60. Mongolia



＜特集＞モンゴルの先生の子育て奮闘記











第60番学校4年生のクラスの子どもたち 2011年10月 モンゴル・ウランバートルにて　　Photographer：Save the Children Japan

「私たち、教師自らが変わることで、生徒たちとの関係が良くなっています。」

―― モンゴルの先生たちから、喜びの声が届きました。

いつもご支援をありがとうございます。今回は初めに、こんなエピソードをお届けします。
モンゴルで、ある男の先生が、自分の言うことをきかない生徒を、毎日のように叱り続けていました。
それを見ていた他の生徒たちは、先生を怖がり、教室の雰囲気は、いつもどんよりしていたと言います。
でも、「あること」がきっかけで、「自分は間違っているかもしれない」と反省した先生は、
勇気をふりしぼり、ある日、クラスの全員がいる前で、その生徒に謝りました。
「先生は、これからは叱りません。そして、あなたのことを尊重します」と。
その瞬間です！クラス中の子どもたちが、「うわぁ～！」と目を輝かせ、教室中が明るくなり、
その日から、子どもたちとの関係が良好になったそうです。

この、先生が子どもに謝るきっかけとなった「あること」というのが、
ＳＣが先生たちに普及した子育ての考え方、「ポジティブ・ディシプリン」に他なりません。
私たちは今回、モンゴルの16の公立学校で、「ポジティブ・ディシプリン」の教員研修を実施しました。
「力」によって子どもをしつけることがほとんどだったモンゴルで、
今、この子どもの目線に立った子育て法が多くの先生に受け入れられつつあります。
今号のニュースレターでは、「ポジティブ・ディシプリン」を授業に取り入れた先生のインタビューや授業の様子、
そして、モンゴルでこの子育て法が受け入れられている理由をお伝えし、
皆さまにも、そのエッセンスを知っていただけましたら幸いです。

＊そもそも「ポジティブ・ディシプリンとは何か」、さらに、ポジティブ・ディシプリンの普及活動については、5ページ先の「more information」ページで説明しています。

SCは、セーブ・ザ・チルドレンの略です。
SCJは、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略です。

Mongolia

Positive Discipline

第60番学校の教育現場を変えるポジティブ・ディシプリン

教員研修に参加した ノロヴツェレン先生にお話を伺いました。

今年10月、首都ウランバートルにある第60番学校に、ノロヴツェレン先生を訪ねました。受け持ちの4年生のクラスには、生徒が29名。彼らの小学校生活5年間を、先生が担当しています。その子どもたちとの出会いは鮮烈だったようです。「私のクラスは遊牧民の子どもも少なくありません。幼い頃から馬で駆け回るような子たちですから、一時もじっとしてくれませんでした」と笑います。







ノロヴツェレン先生は教員歴20年のベテラン。4人のお子さんがいます。

「授業に集中してもらうこと」は、先生にとって常に課題でしたが、ポジティブ・ディシプリン（ＰＤ）の「子どもの気質」に関する考え方が、先生にインスピレーションを与えたそうです。「生徒一人一人は違う気質を持っています。つまり、授業にずっと集中できる子もいればそうでない子もいます。そして、一人の生徒でも、体調によっては集中できる日とそうでない日があるのです。そのことを学んでから、授業への参加のメリハリは、ある程度、子どもたちに任せようと決めました。そのかわり私は、子どもに時間を感じさせない授業をすればいいのです」と、きっぱり。そんな先生の授業は、子ども主体そのもので、テンポの良い先生の問いかけに、子どもがよく発言し、そしてよく笑います。







このように、ＰＤを着実に実践するノロヴツェレン先生ですが、以前は、静かにならない子どもたちを大きな声で叱ったりひっぱったりした経験もあるとか。そのことに悩んでいた頃、他校の授業を見学する機会があり、モデル授業を担当した先生の姿に感銘を受けたそうです。「その先生は、子どもがさわがしい時、ただじっと右手を上げて教室の前に立ち、子どもたちがそれに気付くのを待っていました。私は『これだ！』と思い、自分のクラスでも実践してみたところ、私の生徒にも効果があったんです！」このことがきっかけで、先生は自分の指導法に自信を持つようになったと言います。

最後、ノロヴツェレン先生に、「クラスの子どもたちにどんな大人に成長してほしいか」と質問してみたところ、こんな応えが返ってきました。「私の子どもの頃、モンゴルが民主化される前というのは、全てのことが計画された時代で、目上の人の言っていることが全てでした。でも時代が変わり、今の子どもたちは自由です。その自由な分、物事の良し悪しを自分自身で考え判断できる、そして自分をしっかり表現できる大人になってほしいです」



「先生のこと好き？」と聞くと、全員が「だいすき～！」と応えてくれました。

ノロヴツェレン先生の ポジティブ・ディシプリン実践講座

1 私が右手をあげたら、「先生に注目！」の合図です。

本文中にあった『右手のルール』。「子どもたちが気付くまで私は一言も発しません。このルールを通して、『場の空気を読む力』をつけてほしいと考えています」



2 どんな小さなことでも、クラス全員でほめ合います。

「何か良いことをした子、良い発言をした子に、私だけでなく皆で拍手を送ります。ほめられた生徒は自信を持って、またほめられることをしたいと思うようになります」

3 1年の最初に、子どもたちとルールをつくりました。

「月曜は挨拶の日、火曜は感謝の日、水曜は誇りを持つ日、木曜は尊敬の日、金曜は許し合う日。1日1日、子どもが成長できるように、毎朝、目標を確認し合っています」

more Information

「ポジティブ・ディシプリン」のこと。

「ポジティブ・ディシプリン」は、2003年、当時の国連事務総長の指示により実施された調査・研究「子どもに対する暴力」の結果を踏まえ、カナダの児童臨床心理学者、ジョーン・E・デュラント博士とSCスウェーデンの手により開発された子育てガイドです。叩いたり罰したりするしつけに頼らず、子どもを(人生の)学習者として尊重し、子どもが社会で上手に生きていけるように親や周りの大人が教え導くことを提案しています。PDでは、子どもを育てる大人が、長期的な目標を心に留め、成長した子どもの姿を描きながら、日々の課題に子どもと同じ目線で向き合い、解決していくことを目指します。

[ポジティブ・ディシプリンの4原則]

4 課題を解決すること

3 子どもの考え方・感じ方を理解すること

2 温かさを与えること　2 枠組みを示すこと

1 長期的な目標を決めること

モンゴルの、「教育現場におけるポジティブ・ディシプリン」研修のこと。

今回の教員への支援活動については、デュラント博士が、上記の親に対する子育てガイドを発展させ、「教育現場におけるポジティブ・ディシプリン」としてまとめてくれたものを土台としています。2010年に英語版とモンゴル語版が発行されました。教員研修の対象となったのは、16の公立学校の総勢774名です。まず、ノロヴツェレン先生のように各学校を代表して85名の先生が、SCから集中研修を受け、その後、先生たちは各学校に戻り、他の先生たちに広めています。今回のこの活動において特徴的だったのは、研修の前後において、先生たちの態度の変化や、子どもたちへのインパクトについて、進捗の調査を行いながらPDの実践を行ったことにあります。その中で、「担任の先生を怖い」と感じる小学生が、研修前は全体の29.4%いたのが、研修後には6.5%にまで減少しました。





今回お伝えしたモンゴルの教育支援活動は、国際協力機構(JICA)の助成を受け、実施されました。

今回のポジティブ・ディシプリン(PD)の教員研修には、モンゴル国立教育大学のミャグマル博士が関わってくださいました。最初にご紹介した男性教員の話は、実はミャグマル先生が本人から直接聞いた話です。「私が指導した先生たちが、子どもたちによい影響を与えていることは、本当に嬉しいことです」と、ミャグマル先生は言います。

先生によると、PDの評判を聞きつけた他校からも、研修の依頼が入るようになり、また、教鞭をとる教育大学では、PDが正式な単位として認定されることになりました。

このように、SCの支援を超えてPDが広まる理由の一つとして、先生は「タイミング」を挙げます。「モンゴルでは2006年に教育法が改正し、『全ての体罰を禁止する』ことが決まりました。それ自体はとても良いことなのですが、今度は現場の先生から、『今後はどうやって子どもたちを指導していけばいいの?』という声があがったのです。ちょうどその時に、SCが体罰によらない新しい指導法を提案してくれました」

さらに、「研修中は、私が一方的に教えることはしませんでした。『子どもの良い手本になりたい』という目標のもと、参加した先生たちは日頃の悩みを本音で語り、相談し、そしてPDを実践して成功した体験を共有し合いました。こういう実践的な研修が、先生たちにとっては新鮮であり、そして周りの学校に広まっている理由だと思います」と付け加えてくれました。

「PDを学んだ先生たちは、自分自身を見つめ直すところから始め、最後は自分で指導法を見出していきました。自分が考えた指導法でクラスの問題が解決した時の喜びは、『自分もやればできるんだ!』という自信につながり、そんな先生の指導を受ける子どもたちは、さらに成長していくという良い循環が生まれています」

「教育現場が変わってきたのは、
子どものために頑張る
先生たちの熱意と努力の賜物です。」

モンゴル国立教育大学 心理学部長
「ポジティブ・ディシプリン」プロジェクトチーム アドバイザー
オチルジャブ・ミャグマル博士



Positive Discipline



Japan
［ 日本 ］

日本においても、
ポジティブ・ディシプリンを普及しています。

特集でご紹介したポジティブ・ディシプリン（PD）ですが、日本でも普及活動を行っています。その1つとして、東京都豊島区の「家庭教育推進員」との連携事業は、今年2年目を迎えました。約50名の保護者が、1年をかけてPDを学び、伝え、成果を発表する取り組みです。月例会では、「子ども視点とは？」といった話題など、日々の子育て談義を重ね、子どもの自信とちからをのばす子育てを、さらに多くの人に発信する準備を進めています。



Sri Lanka
［ スリランカ ］

幼児教室が現地に根付くよう、地元の人々と
一緒になった取り組みを行っています。

復興が続く東部州トリンコマレ県では、SCJ57号でご紹介した就学前教育の支援が継続中です。今年度は、施設の環境整備や教員の能力強化に加え、「幼児教室運営委員会」の能力強化を目指しており、幼児教室の運営に必要な財源を確保するため、養鶏場や米粉製粉所などの所得創出活動を行っています。2012年が事業の最終年となりますが、幼児教室が継続して活動できるよう、教員や運営委員会の能力の一層の向上に取り組んでいきます。



Kenya
［ ケニア ］

干ばつの被災者が安全な水にアクセス
できるよう、緊急支援活動を展開中です。

ケニア北東州ワジール南県とハバスウェイン県で、過去60年で最悪と言われる干ばつ被災者に対する緊急支援活動を行っています。10月半ばに、現地では3年ぶりに雨が降り出しました。恵みの雨ではありますが、給水地が遠い場所では、地域に雨水を貯める方法がないと、子どもたちは安全な水を常に飲めるとは限りません。SCJは、小学校や診療所に集水タンクを設置し、家庭用に貯水容器を配布して、安全な水へのアクセスを改善する活動を展開しています。



Japan
［ 日本 ］

学校内外の子ども支援を通して、
東北の方々と復興の道を歩んでいきます。

学校内外で、まだ様々な不自由を強いられている子どもたち。状況やニーズに応じて、また、中長期的な視点にたって、復興支援活動を展開中です。例えば、2学期に実施される避難訓練に先立ち、防災ずきんを配布したり、学外では、ご自身も被災された学童指導員の方々をサポートするため、行政と連携を図っています。さらに、子ども支援NPOの活動支援を行う協働事業を地域の財団と立ち上げました。今後も、地域の子どもたちと共に復興に取り組んでいきます。



Afghanistan
［ アフガニスタン ］

学校でのスポーツの振興と、女性教員の不足を
緩和する活動を計画しています。

本誌の裏表紙でもご紹介しています「大阪マラソン」からのご寄付で、学校でのスポーツ振興と、深刻な女性教員不足を緩和するための活動を計画しています。小・中学校の子どもたちに人気のバレーボールや運動靴を配り、学校対抗の男女バレーボール大会を企画しているほか、将来先生になることを希望していながら、高校への通学が困難な女子生徒たちに、バスなどの通学手段を確保し、教員になる夢を叶えてもらうことを目指しています。



Nepal
［ ネパール ］

大地震に被災した子どもたちへの
緊急教育支援を実施しています。

9月に発生した大地震により、ネパール東部では、1,000校にのぼる学校が被害を受け、約20万人の子どもたちの教育に影響を与えました。また、今回の地震により、自然災害の多発するネパールにおいて、学校における防災の重要性が再認識されています。ＳＣでは、震災直後の物資配布に引き続き、教室建設・修繕や学校ベースの防災教育の実施を中心に、子どもたちが再び安心して学校に通えるように緊急支援活動を行っています。

各国活動の進捗・報告

活動国における支援の進行状況や
結果などについて、その一部をお知らせします。
今年後半に入ってからも、
世界各地で自然災害が多発しており、
SCJは、各地で緊急支援活動を行っています。



Save the Children JAPAN

今回お伝えしたケニアの活動はジャパン・プラットフォーム（JPF）から、スリランカの活動は、外務省 日本NGO連携無償資金協力から助成を受けています。

＊みんなの広場＊

冊子「ＳＣＪ」は、私たちの活動をもっと丁寧にお伝えし、皆さまに共感いただくこと、
また、世界の子どもたちをはじめ、ＳＣＪに関わるすべての人のことを皆さまの近くに感じていただくことを目指しています。
この「みんなの広場」では、ＳＣＪからのお知らせをはじめ、皆さまからのメッセージやご質問も掲載いたします。

読者アンケートへのご協力を ありがとうございました。

前回のSCJ59に同梱させていただいた
読者アンケートですが、たくさんの方から反応を
いただきました。10月の1ヶ月間で、全体で572名分の
回答が集まっています。アニュアルレポートや
ニュースレターの点数評価に加え、有益なコメントも
たくさんいただきました。お寄せいただいた
ご意見・ご感想は、団体内で共有し、来年度の
広報活動の参考とさせていただきます。
まずは、この場を借りて御礼を申し上げます。

Save the Children JAPAN

石巻市立稲井中学校の皆さんが、東京のオフィスを訪問してくださいました。







10月18日、SCJが東日**本大震災の**
支援として給食支援を**実施した、**
石巻市立稲井中学校の**3年生の**
皆さんが、東京のオフィスを**訪問し、**
支援への感謝の色紙を届けて
くださいました。
この他にも、SCJが活動した
先の皆さまから、お礼や**近況報告の**
お手紙などをいただき、**団体一同の**
励みとさせていただい**ております。**

Save the Children JAPAN

ＳＣの子育てガイド「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」ご興味のある方は、ぜひお手にとってください。



今号で、モンゴルの事例を通してお伝えしたＳＣの薦める子育ての考え方
「ポジティブ・ディシプリン」ですが、SCJでは、保護者のための子育てガイド
「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」を一昨年に監修・出版しました。「内容をもっと深く
知りたい」という方がいらっしゃいましたら、ぜひお手にとっていただけましたら幸いです。

Save the Children JAPAN

「親力をのばす0歳から18歳までの子育てガイド
ポジティブ・ディシプリンのすすめ」
お問い合わせ：明石書店 03-5818-1171

ＳＣＪのフェイスブックとツイッターにぜひジョインしてください。

ぜひアクセスして「いいね！」ボタンを押してください。
http://www.facebook.com/SCJ.SavetheChildrenJapan

ツイッターも引き続き、やっています。ＳＣＪ全体に関わる情報は
http://twitter.com/#!/scjapan

「EVERY ONE」の情報は
http://twitter.com/#!/akachan5

ぜひジョインしてください

Save the Children JAPAN

ご支援者の皆さまへ

ご住所、電話番号、メールアドレスなど、ご変更がありましたら、
弊会の「ドナーサービス係」まで必ずご連絡ください。
電話番号は裏表紙の下、メールでのご連絡は、
donation@savechildren.or.jp宛によろしくお願いいたします。

Save the Children JAPAN

＊「みんなの広場」へのご投稿について＊

メッセージやご質問など、文章の長さは問いません。郵便か電子メールでお送りください。氏名を明記ください。掲載の場合は一部編集させていただくことがあります。実名掲載が不可の場合、一筆お書き添えください。送り先は裏表紙、「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ニュースレター編集係」宛。メールアドレスはvoice@savechildren.or.jpです。いただいた個人情報は責任を持って厳重に管理させていただきます。



編集者のコラム

モンゴルに視察に行ってきました。特集の写真は私が撮影しました。
取材ノートが1冊終わるほどの情報を持ち帰りましたが、今回お伝えできたのは
半分にも満たないかもしれません。残りはホームページでお伝えしていきます。お楽しみに。
ところで、表紙写真の2人は、ノロヴツェレン先生のクラスの生徒です。
舞踊をやっていて、賞を獲ったと、誇らしげにメダルを見せてくれました。
これも、先生の個性をのばす指導のおかげかなと思います。

現地ウランバートルは、経済成長の真っただ中で建設ラッシュ。車の交通渋滞もアチコチで起きていました。
第60番学校は街中心から車で南西に30分くらい行ったゲル地区にあります。
校舎からふと外を見ると、巨大な火力発電所が、もくもくと煙をあげていて、ビックリしました。
子どもたちの笑顔との対比が何とも言えず、どちらもモンゴルの今を象徴するものかなと感慨深かったです。
また近いうちに子どもたちとノロヴツェレン先生に会いたいです。



「SCJ」編集担当／岡田茜

Stakeholder Interview & Information

＜特別インタビューとお知らせ＞



RICOH

株式会社リコー
CSR室CSR企画推進室スペシャリスト
赤堀　久美子様

「リコーの強みを活かして、社会の課題解決に貢献していきます」



株式会社リコーには2011年から、SCとの協働で、インドの教育環境を改善するプログラムを実施していただいています。この協働は、企業の社会貢献分野をリードするリコーの、「本業の強みを生かしながら、グローバルな問題の解決に関わっていきたい」とする、「社会貢献と企業の成長の両立」というお考えがきっかけとなっています。今回のインド農村部における教育事業では、まず、デジタル印刷機の開発を行う商品事業部から、現地で必要とされる教材や試験用紙などが大量印刷できるよう、印刷機が寄贈され、既に活用が始まりました。これと同時にリコーでは、こういった大量印刷機が普及していない地域での市場拡大の可能性について、調査も実施されています。「教育環境の改善とマーケティングの両立」というコンセプトでNGOと協力関係を結ぶことは、リコーにとっても初めてのこと。「事業活動に社会貢献を組み込んだモデルを創るために、今回のプログラムで、ＳＣと一緒にぜひ成果を上げていきたいです」とメッセージをいただきました。

ヒルトン東京ベイが東北の子どもたちをご支援くださいます。

Hilton Tokyo Bay

東京ディズニーリゾート®のオフィシャルホテルであるヒルトン東京ベイ（千葉・浦安）が、今年もホテルロビーで、『ヒルトン東京ベイ・クリスマス・トレイン』の展示を開催します。展示は来年2012年1月9日まで。この広告の収益の一部を、東日本大震災の被災地で生活する子どもたちのために設立された「RESTART JAPAN ファンド」にご寄付くださいます。お近くの方はホテルへぜひいらしてください。



http://www.hiltontokyobay.jp/

第1回大阪マラソン。3万人のランナーがチャリティーラン！

OSAKA MARATHON 2011

10月30日に、第1回大阪マラソンが開催されました。大会の特色の1つが「チャリティー」。3万人のランナー全員が、参加料に含まれる500円の募金先を選んでエントリーするというユニークな仕組みで、ＳＣも募金先の1団体としてご支援いただきました。大阪マラソンの皆さまからいただいたご寄付は、アフガニスタンとスリランカの子どもたちへの教育とスポーツ支援に活用させていただきます。



http://www.osaka-marathon.com

ホームハンズ・マツモトが引っ越し代金の一部をSCJへご寄付くださいます。

株式会社 ホームハンズマツモト

引っ越し業者の株式会社ホームハンズ・マツモトからは、お客様の引っ越し代金の一部をＳＣＪにご寄付いただくことで、世界の子どもたちをご支援いただいています。「信頼される企業と人となろう」という企業理念に沿った社会貢献について、社員の皆さまで話し合った結果、SCJを支援先として選んでくださったとのこと。今年春にSCJが大阪事務所を移転した際は、引っ越し作業にもご協力をいただきました。



http://www.homehands.co.jp/

発行：公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル 4F　ご支援に関するお問い合わせ：03-6859-0068（平日 9:30-18:00）

2011年11月発行　印刷協力：星光社印刷株式会社